

爽やか先輩の裏の顔は。

うどん屋からホテルのM字開脚で、
見るだけの約束を蹂躪するクリトリス集中責めと、
どちゅとろセックス。

仕事を、すつごく丁寧に教えてくれる先輩。

シャープな顔立ちで、黒髪を軽く流した爽やかな彼に、地味な私は、ひそかに恋心を抱いていた。

飲み会でも、真面目な感じなんだ……。

会社の飲み会でも、先輩は全く崩れる様子がなく、社長や専務と仕事の話ばかりしているようだ。そんな憂鬱な会社の飲み会が終わり、一次会で帰ろうとした時、その先輩がこっそりと私に言う。

「しめに、うどん食わねえ？」

「あ、はは。えっと、はい……」

ちよつと、笑っちゃついそう。でも、うどんに惹かれたわけでは無く、胸がときめく。

「チェーン店で悪いけどさ」

は○なるうどん、と言うチェーン店で、並びながらうどんを受け取って席に着く。

「テーブル席、空いてないな。カウンターでいい？」

「どこでも……」

窓際のカウンターで隣り合わせになり、二人でうどんをすすった。私もまあまあほろ酔い気分。そして、隣の先輩からは、男の色気がむんむん漂ってくる。

すると、先輩が突然耳元で囁く。

「なあ、クリトリスみせてくれよ。一瞬で良いから」

思わず、うどんを嘔き出しそうになり、私は耳を疑った。

……こんな、下ネタをガツツリ言う人だっけ？

「だ、だめですよ。そんなとこ、みせるもんじゃないです。何、言ってるんですか」

「あ。だめ？ そっか」

「先輩、酔ってます？」

「うん。エロくなってる」

そんな会話を、うどんをすすりながら、普通にしているなんて変。けど私は、じゅくつと疼いた。思わず先輩が、私のクリトリスを見ているところを想像してしまったから。

イケメンの先輩に、じっと見られたら……。

私も、酔いに任せて言ってしまう。

「なにもしないですか？」

……なにいつてんだろ。と思いつつ、先輩の表情を伺う。うん……エロを考えてる男の顔。

すると先輩が言う。

「なんもしない。見せて」

「本当に見せるだけですよ」

「見たい」

おかしな約束をして、うどん屋を後にした。二人はタクシーを拾い、ラブホテル街に直行する。部屋に入り、鍵をしめると、先輩は私の手をぐいぐいと引っ張って、ソファアに座らせた。

「力を抜いて」

そして目の前の床に膝をつき、スカートの中に手を突っ込んで来る。

きゃーーーーー！　と思いつつ、冷静なふりをして言う。

「本当に見せるだけですよ？」

「うん。本当にみるだけ！」

いや、鼻息が荒い。

パンストを下げてポイっと横に投げ、先輩は私の両ひざを持ってソファアの上に足を引き上げた。グイッと抑えられて、M字開脚で先輩の前に、股を開いてしまう。

カーッと真っ赤になっているが、先輩はもう股間しか見てない。

「かわいい、パンティなんだ」

「そ、そうでもないです」

「この、レース可愛いじゃん。センスいいよ」

「あ、ありがとうございます」

そして先輩は、一瞬だけ私の目を見つめてから、スツと股間に手を伸ばした。

さわっ。

パンティーの付け根を掴み、スツと布をめくる。外の空気に、おまんこが触れてひやりとする。先輩は、わたしの股間を食い入るように凝視していた。

「は、恥ずかしいです……」

「なかも、可愛い」

さつきまで何の関係も無い先輩後輩だったのに、いきなり、おまんこまるだしにして見せている。

すると、先輩は言う。

「……皮でよく見えない」

「そ、それは……その」

自分でもまじまじと見たことはないが、どうやらよく見えないらしい。

「剥いていい？ 見るだけって言ったけど……」

「み、みたいのなら。どうぞ」

先輩の指先が、わたしの蕾をくりゆつと剥いた。

「あっ
♡」

「見えた」

クリトリスをまる出しにされ、じっと見つめられていると、私の興奮も盛り上がってくる。

「あ、おつきくなってきた」

「そ、そんなところ、実況しないでください……っ」

顔から火が出るほど恥ずかしいのに、股間は先輩の視線という熱を浴びて、ズキズキ脈打ってる。先輩の細長い指が、わたしのクリトリスを剥き出しにしたまま固定して、その指先が、ほんの少し、震えているのがわかった。

先輩も……緊張してるんだ……。

「……すごく、綺麗だ。ピンク色で……熱くて、ピクピク動いてる」

爽やかだった仕事中の声とは別人。欲望を隠しきれない、獲物を前にした男の響き。

「……んっ。も、もう見たから終わりです」

「わかってるけど、あんなに大人しかった君の体の一部だと思つと、頭がおかしくなりそうなんだ」

先輩はそのまま顔を近づけて、わたしの秘部を凝視し続けた。至近距離。彼が吐き出す熱い息が、剥き出しのクリトリスにふっとかかる。

「ひゃうんっ!？」

ただの息。触れられてもないのに、敏感すぎる神経が過剰に反応して、腰が勝手に跳ねた。

「……濡れてきたね。……ほら、とろっとろに蜜が出てきた」

結局、先輩の指がクリトリスをくりゆつ、くりゆつとなぞる。見るだけと言いつつ、指先はもう、我慢しきれないように動き始めていた。

「見るだけって……あ、あ……っ。せん、ばい……それ、ずるいです……っ」

「ごめん。でも、……一回だけ、舐めていい？ 本当に、一回だけ」

……これを許したら、もう戻れない。けど、わたしの身体は先輩に汚されることを待ち望んでる。地味な先輩でしかなかったわたしが、今、ホテルの一室でメスとして扱われている。その背徳感に、おまんこはさらに蜜を溢れさせた。

「……一回、だけですよ……？」

わたしのその言葉は、もはや許可ではなく懇願だった。それを聞いた、先輩の瞳がギラリと光る。彼はわたしの両腿をさらに強く押し開き、そこに顔を埋めてくる。

じゅるりっ……！！　ちゅぷ、じゅるうう……っ！！

逃げ場のないM字開脚のまま、ピンポイントで神経を逆なでされる。

「んくうっ」

一回なんて嘘だった。

剥き出しのクリトリスを丸ごと飲み込み、掃除機のような圧で、じゅぶじゅぶつと吸い上げては、レロレロレロツと高速で掻き回す。

じゅぷ。くりゅ。くりゅくりゅくりゅくりゅくりゅくりゅ。

舐めるの、長iiiiiiii！！